

英米文化学会会報

第44号

平成12年7月31日版



ピカデリーサーカス

目次

英米文化学会第18回大会開催のお知らせ
大会発表要旨
事務局からのお知らせ

英米文化学会第18回大会開催のお知らせ

開催日：平成12年9月9日(土)・10日(日)

場所：盛岡大学 〒020-0183 岩手郡滝沢村滝沢字砂辺808

(大会会場の盛岡大学への直接コンタクトはご遠慮ください)

当日会費：一般500円 学生300円

大会事務局：〒101-8310 千代田区神田駿河台1-18-13 日大歯学部佐藤英語研究室

9月9日

研究発表<13:40-15:10>

1. 英文読解に対する日本人大学生の不安の研究

松村 優子(京都橘女子大学)

司会 佐久田 英子(拓殖大学)

2. ディベート教育による論理的・批判的思考の指導

木村 みどり(青山学院大学)

司会 平川 敦子(城西大学)

講演<15:20-17:00>

演題：見えないアメリカ
大島 良行(専修大学教授)

9月10日

研究発表 <9:30 - 14:10>

1. 中国人からの手紙：ゴールドスミス『世界市民』の歴史的位置付け

橋本 順光（東京大学大学院）
司会 大東 俊一（人間総合科学大学）

2. 感覚を表す英語表現とメタファー

赤堀 志子（昭和女子大学）
司会 鈴木 俊二（国際短期大学）

3. マーク・トウェインのcivilization 認識

佐野 潤一郎（創価大学）
司会 佐藤 成男（玉川大学）

4. ホームコメディからの脱出

越智 敏之（千葉工業大学）
司会 石原 万里（福島工業高等専門学校）

5. 青少年の自己評価についての国際的調査

馬嶋 治男（拓殖大学）
司会 伊澤 章（拓殖大学）

懇親会：9月9日6時30分。 場所：ホテル・メトロポリタン盛岡ニューウィング

会費：5,000円

9日は午後1時にホテルメトロポリタン盛岡より大会会場までシャトルバスが運行されます。希望者は時間までにホテル旧館(駅に近い方の建物)1階ロビーまでお集まりください。帰りは全員、一緒にシャトルバスにてホテルに戻り、懇親会会場まで参ります。10日は、朝8時にシャトルバスが出発する予定です。宿泊をなさる予定でない会員も、遠慮なくシャトルバスにお乗りください。

大会後のエクスカージョンはAコースのみとなりました

田沢湖・角館コース 代金30,000円

9月10日(日)盛岡 17:30 --> 繫温泉泊

9月11日(月) 繫温泉-->仙岩峠-->田沢湖畔(遊覧船40分)-->角館(昼食) 武家屋敷・青柳家、伝承館見学-->角館駅 15:05-->仙岩峠-->盛岡駅解散 16:30

第18回大会研究発表レジュメ

第1日

1. 英文読解に対する日本人大学生の不安の研究

松村 優子（京都橘女子大学）

近年、外国語学習に及ぼす情緒面のような心理的要因の研究が盛んになってきている。特に、「不安」は様々な言語活動にマイナスの影響を与えることが先行研究でも論じられているが、これまでは口頭による言語活動との関係を論じた研究が多かった。外国語の読解と不安との関係を論じた実証研究も出版されているが、EFL環境下での日本人英語学習者を対象にした実証研究は稀である。本発表では、日本人大学生のほとんどが受講している読解の授業や読解テストに対してどのような不安を抱いているかを調査する。2種類の質問紙調査 教室での外国語学習に関する不安アンケート(FLCAS)と外国語読解に関する不安アンケート(FLRAS) の実施報告を行い、その回答を統計処理し、更にインタビューによる質的調査分析を加える。結果や教育上の示唆を考察した後、読解に関する不安を解消するためにはどのような教室指導方法が考えられるかを模索したい。

2. ディベート教育による論理的・批判的思考の指導

木村 みどり（青山学院大学）

カナダ、アメリカでは1970年代からCritical Thinkingの重要性が唱えられ、多くの大学が教養課程のカリキュラムにCritical Thinkingの指導を組み込んでいる。しかし、日本ではこの点において、大きな教育改革はされていない。そして、アカデミック・ライティングを指導する多くの英語教師は「論理的思考、批判的思考の出来ない学生への指導の困難さ」という悩みを抱えているように見える。果た

してそんなに多くの学生が本当に無能なのだろうか？教師の指導いかんによって学生の思考能力を高めることができるのではないか？その指導方法の一つとして、ディベートを取り上げる。ディベートがなぜ論理的・批判的思考能力を高めることができるのか、ディベートの構成、ルールを紹介しながら分析する。また、実際の英語ディベートの指導例を取り上げながら、その効果を述べる。

第2日

1. 中国人からの手紙： ゴールドスミス『世界市民』の史的位置付け

橋本 順光（東京大学大学院）

Oliver Goldsmith が 1762 年に刊行した『世界市民』The Citizen of the World は、中国人の目をかきた諷刺文集である。作中、ロンドンへやってきた中国人リエン・チー・アルタンギーが、故郷あての手紙のなかで、中国に比べて奇妙で異質な英国社会を諷刺し、批判するのである。しかし、その面白さと重要性にもかかわらず、『世界市民』は、従来、ほとんど論じられてこなかった。発表では、本作品を文化史的に位置づけ、その再評価を試みたい。まず、作中の近代西欧文明への批判が、それまでのどのような思潮をふまえているか、を考える。とりわけ、古代と近代のいずれの学芸が優れているかという、十七世紀末から始まった新旧論争が、『世界市民』において変奏されていることを示唆する。次に、『世界市民』が後世に及ぼした影響を論じる。中国人からの手紙という形式で、ほぼ同様の西欧批判が十九世紀においても繰り返されていることを指摘する。その際に、『世界市民』との相違点は、どこにあるのか、あるとするならそれはなぜなのかも、考察する。

2. 感覚を表す英語表現とメタファー

赤堀 志子（昭和女子大学）

言葉には基本となる意味があるが、私たちは日常生活において、その意味を拡張して使ったり解釈したりする。拡張された意味は、その言葉の意味として定着することもあれば、コンテキストに依存してのみ、その意味をなす場合もある。また、社会的、文化的な背景によって表現の意味が限定されたり、ほかの意味が付加されることもある。この発表では五感に関する言葉に焦点を当てる。感覚とは直接関係のない言葉で感覚を表す表現が飾り、メタファー的な意味を作り出す場合がある。そうした事例を挙げながら、感覚を表す表現の表しうる意味の範囲について、社会的背景を考慮しつつ、歴史的な流れにも目を向けながら考察を試みる。

3. マーク・トゥェインのcivilization 認識

佐野 潤一郎（創価大学）

マーク・トゥェインの作品中にはcivilization に関連した語が数多く出現する。これらの語がトゥェインの作品中どのように使われているかを検証する事で、彼がcivilization という概念をどのように位置づけているのかを探る。

このテーマにそって、civilization という語が多く見られる作品で、尚且つトゥェイン自身が第一人称で語る三つの作品を扱う。トゥェインがthe mother of civilization"と呼んだ欧州・近東への旅行記 The Innocents Abroad、当時 civilization の最前線と見做されていたアメリカ本土西部とハワイ諸島への旅行記Roughing It、そして太平洋諸島・オセアニア・南アジアなどへの旅行記で、civilization の功罪を大きく取り扱ったFollowing the Equator を扱う。

4. ホームコメディからの脱出

越智 敏之（千葉工業大学）

五〇年代に入ると、ニューディール政策最後の大型プロジェクトのおかげで郊外が急速に拡大したため、企業にとって大きな商機が訪れた。もともと消費社会の尖兵としての側面を持ち合わせていたホームコメディに多くの企業が投資し、郊外を舞台とし、白人家庭を扱ったホームコメディが大量生産される。そして同時期のTVの普及も手伝って、新興の郊外にはある種の幻想が付きまとうようになる。この幻想の一面を捉えて、ベティ・フリーダンは「フェミニン・ミスティーク」と呼ぶわけだが、実際にはこれは「ファミリー・ミスティーク」と呼ぶべきものだった。

郊外の拡大は同時に戦後ベビーブームの持続を可能にし、多くのベビーブーム世代が郊外で郊外を舞台としたホームコメディを家族揃って鑑賞し、その登場人物に自己投影をしながら育つことになる。このベビーブーム世代が六〇年代以降の解放運動の担い手となるのだが、今回の発表では、「ファミリー・ミスティーク」、あるいはホームコメディからの解放と呼ぶべき動きが存在することを、映画などを通じ

て説明していく。

5. 青少年の自己評価についての国際的調査

馬嶋 治男 (拓殖大学)

学生・生徒の行動の説明に、彼ら自身の自己観念(self-esteem)の研究の重要性が考えられている。"How I See Myself" test (自己評価質問紙)を使って、次の観点から日本の学生の状況を浮き彫りにする。

1. 国際比較(Sweden, Finland, Japan, Australia and the United States)
2. 時代比較(1975年の調査と2000年の調査)
3. 大学生と高校生の比較

自分自身をどのように考えているかについての42の質問に対して、肯定的か否定的かを、次の8つのカテゴリーに分類して比較研究する。1. Teacher-School 2. Physical Appearance 3. Inter-Personal Competency 4. Autonomy 5. Academic Competency 6. Physical Competency 7. Emotional Competency 8. Language Competency

『英米文化』投稿希望者へのご案内

『英米文化』第31号の投稿締め切りは10月31日です。投稿規程は『英米文化』第30号の161頁をご覧ください。新入会員で投稿規程が必要な方は事務局までお申し込み下さい。メールまたはファックスにてお送りします。その他投稿に関してのご質問は学術担当の田邊治子理事(E-mail: tanabeh@dh.catv.ne.jp Tel: 03-3722-0235 Fax: 03-3721-9325)までお寄せ下さい。

事務局からのお知らせ

会員の動き

ウェブ公開版は省略しています

英米文化学会会報 第44号 編集・発行：英米文化学会編集委員会 = 池田 広子、小川 喜正、
岸山 睦、中村 豪、山根 正弘
発行責任者： 中村 豪 〒363-0027 埼玉県桶川市川田谷2509-12 048-787-4693

年会費等振込先：郵便振替 加入者名 英米文化学会 口座番号 00160-7-611777

問い合わせ先 英米文化学会事務局 佐藤治夫 03-3219-8160 ファックス 03-5204-8787

E-mail: shakey23@tky.3web.ne.jp 学会ホームページ <http://www.threweb.ad.jp/~shakey23/>